



オープニングセレモニー(右から2番目が島尾会長)

ASEAN・日本HIV/AIDS ワークショップ

—アンコールは遠かった—

財団法人エイズ予防財団 山崎 厚司

平成19年度 ASEAN (東南アジア諸国連合)・日本HIV/AIDSワークショップが、2008年2月18日から22日まで、カンボジア王国プノンペン市において開催された。

このワークショップは、今後のHIV/AIDS予防における国際協調、特にアジア地域の協調の重要性に鑑み、わが国が同地域における国際協調に積極的貢献を果たすべく企画されたものである。

対象国は、国際的な保健問題に取り組む際の枠組みとなるWPR (西太平洋) やSEAR (南東アジア) といったWHOの地域区分によるものではなく、ASEANという共通の目的によって結ばれた地域協力機構に加盟する10ヵ国 (シンガポールとブルネイは欠席) で、より地域に共通した課題を取り上げることができた。また対象者は、HIV/AIDS予防対策を検討する際の重要なファクターである、①HIV/AIDS対策担当者、②医療従事者、③患者・感染者をサポートするフロントラインワーカーの、各国3名である。

エイズ対策のモデルを求めて

カンボジアのエイズ流行は1990年代後半急速に広がった。そのため政府は1998年に国立エイズ・皮膚病・性感染症センター (NCHADS) を設置、翌99年には関係省庁の活動を調整するNational AIDS Authorityという組織を作り、エイズ対策を最優先課題として取り上げた。その結果、98年には2.0%と推計された成人 (15~49歳) のHIV感染率を、06年には0.9%にまで減少させることに成功した。カンボジアのエイズ対策の現状を視察し、成功要因を探り、参加各国のモデルとなることを期待して、カンボジアで開催することとなったのである。

ワークショップ初日は、カンボジア保健省Mam Bun Heng大臣の挨拶から始まり、エイズ予防財団からも島尾会長が主催者の一人として挨拶を行った。引き続き、カンボジアの経験に学ぶと題し、NCHADSセンター長Mean Chhi Vun医師による、カンボジアのHIV/AIDSの状況・対策に関する講演が行われた。その中で、①諸機関の連携とコミュニティの参加、②政府のコミットメント、③国際機関などとの協調が、成功の鍵となることが話された。

2日目はフィールドトリップに当てられ、予防対策2グループとケア・治療2グループの、計4グループに分かれ現状視察を行った。島尾会長と

筆者は予防対策グループの一つに参加し、Cambodia Women for Peace and Development (CWPD) というNGOを訪問、ピア・エデュケーション、セックスワーカーへの100%コンドーム使用推進活動を見学した。少女たちが2ドル足らずで体を売る、バラックのような売春宿の訪問はショックであった。

3、4日目にはフィールドトリップのレビュー、カンントリーレポートの発表、職種ごとのグループワークなどのプログラムが組まれていた。日本からも「Beyond ART (抗HIV治療の先)」と題して、HAART療法により著しく予後の改善されたHIV感染者の、エイズ以外の医療問題について発表があった。

また、各国の行政担当者を対象とした会議を開催し、青少年のエイズ予防対策問題を話し合った。

ワークショップは3年計画の2年目で、初年度はタ



CWPDのドロップインセンターでの会合

イの成功要因を学び、締めくくりとなる平成20年度は日本での開催を予定している。このワークショップが今後のASEAN各国のHIV/エイズ対策推進に寄与することを期待するところである。

カンボジア訪問を終えて

さて、カンボジアといえばアンコールワットである。初めてのカンボジア訪問。日本を発つ前からアンコール訪問を企てた。しかしいざ始めてみるとなかなか抜け出すのは難しく、かといって「お腹の調子が悪いので部屋で休んでます」と嘘をつく度胸もない。島尾先生から「カンボジアは初めてかい」と尋ねられたときに、一瞬優しい言葉を期待したのだが……。この度のカンボジア訪問に触発され、またいくつかの偶然が重なって、国際協力を専門に行っている団体にリクルートすることとなった。アンコールを訪れる機会は近いかもしれない。

最後に、現地情報提供など便宜を図っていただいた、同国結核ハンセン病対策センターで結核対策プロジェクトに活躍されている結核研究所の諸氏に深く感謝申し上げる。